

平成24年10月5日



龍 泉 院

従容録に学ぶ（五一）

第七三則

曹山孝満

〔示衆〕

衆に示して云く、草に依り木に附去いて精靈となり、屈を負い冤を喰み來つて鬼崇となる。これを呼く則は、錢を焼き馬を奏う、これを遣う則は、水を呪し符を書く。如何んが家門の平安なることを得去ん？

〔本則〕

挙ぐ。僧、曹山に問う、「靈衣を掛けざる時は如何ん？」
蟻蟻は、殼を脱して猶お寒枝を抱く。山云く、「曹山は今日、孝満なり。」
(平生に負かず)。僧云く、「孝満の後は如何ん？」(寛行大歩)。山云く、「曹山は顛酒を愛す。」(何の不可ことあらん)

〔頌〕

清白の門庭、四に隣を絶す。長年関し掃つて、塵をも入れず。光明転する處、傾いて月を残す。父象分かるる時、



ともあれ、この「曹山孝満」は、曹山が九世紀末に開いた道場で雲水を指導していく時の機縁。曹山が

却つて寅を建す。新たに孝を満じ、便ち春に逢う。醉歩狂歌、墮巾に任す。散髮夷猶、誰か管係せん。太平無事、酒顛の人。

『従容録』では、曹山さんが機縁の中心になつてゐる則は二つだけ。そのうち、第五二則「曹山法身」はすでに本誌の第六号でとりあげましたので、今回は残る一則です。題名の「孝満」というのは、服喪があけることですが、唐代には父母を亡くしたケースの服喪期間は、なんと三年の長期間にわたり、人目をしのぶ閑居でした。

さて、曹山の名で呼ばれる曹山本寂(八四〇～九〇一)は、洞山さんの法嗣ですね。ところが、のちに曹山門下は洞山門下を凌駕する勢力を持つたことから、自然に「曹洞宗」の宗名が起きました。それほど、曹山さんは唐末きつての禪匠であり、古くから語録二巻も編集されています。道場のあった江西省撫州市宜黄県の曹山は、文革で徹底的に破壊されましたが、七、八年前から本格的な復興が始まりましたから、今ではさぞかし立派な伽藍が立ち並び、多くの僧が居住して僧が居住していることでしょう。

孝満にかけて、禪の悟境がいかに自在活達であるかを明示しています。

まず、万松による【示衆】の意訳は、「凡聖や迷悟などの対立的な二見にとりつかれているのは、あたかも草木にへばりつき、往生もできずにタタリをする鬼神の魂のようだ。

そんな迷執者を救つため、禪のマスターたちはさまざまな手立てを講じるが、さあ、ボンノウを除いて心の安静をえるには、いつたいどうしたらよいかな。」といつたところ。文中の「馬を奏う」とは、魂呼びに紙銭を焼き馬型を供える道教の習俗。

つぎに眼目の【本則】ですが、これは雲水が曹山に向つて「質素な喪服を脱ぎ、モノノウをコントロールした境涯」をたずねたのに對し、曹山は「喪服を着るも脱ぐもこえていい」と答え、「その後の心境」を聞かれて、「酒に酔つてよろめき歩いているサ」と答えたというのです。さいごの泥酔したさまは、いうまでもなく日常生活で遊戯自在のありかたをたとえた表現ですね。

この則は【本則】が短いので、宏智の【頌】をつけくわえておきました。これは七八句ですが、原文はちょっと難しいです。「清らかな家風で比類のないことよ。三年も

服喪して閑かだつたけど、残月の光が移つて冬至に陰から陽に転ずるや、たちまち一陽來復の春がめぐり来つて、もうやることなすことをみな自在無礙だ」と、曹山の境涯を讚えています。原文の難語については割愛とします。

ただし、宏

智の【頌】で重要な点は、

「孝満」という非日常の行事の意義を高く

評価している

一般人が孝満になつてもそつならないのは、ちゃんと服喪していないからです。冠婚葬祭を単に人生の通過儀礼とみて形骸化させてしまい、何の感激も悼みも反省も伴わないならば、それはもう文化の破壊であり、民族の消滅でさえあります。お恥ずかしいことで

すが、私は若く多感などき、たてつづけに両親への服喪を体験し、かえつて大きな充電となりました。

こうしてみると、禪を学ぶ私たちにとっては日常生活も弁道でありますから、当然ながら服喪は大切で絶好の修行！たれしもが体験しなければならない服喪や忌中を、私たちはゆめゆめおろそかにしてはなりません。

喪中は僧俗の別なく小庵に蟄居し、衣食も質素にし世間的なことから隔別します。旅行



復興工事中に出土した古曹山寺の石物

や歌舞観劇も禁止。現今の中国や韓半島では、結婚式も一年延期とか。日本ではどうでしょうか。まあ、習慣の相違はあれ、こうしたとみな自在無礙だ」と、曹山の境涯を讚えています。原文の難語については割愛とします。

つまり、立ち止まって心を内側に向けると、それまで見えなかつた世界が見えてきた、心が豊かになります。曹山は孝満後の心境を、泥酔というあまり感心しない喻えながら、日常中の遊戯三昧と表現したのはむべなるかな。

坐禅堂完工間近に迫る

今年二月五日に地鎮式を行い、その後工匠さんのご尽力で工事は順調に進み、一〇月には完工の予定となっています。

坐禅堂建立にあたっては、ご老師をはじめ、

参禪会会員のみならず、龍泉院のお檀家さんや一般の方々からも、多大なご寄付をいただきました。六月末現在における寄付金申し込は三八二五万円となりました。当初坐禅堂建設費は三八〇〇万円と見込んでいましたので、これまでにご寄付いただきました金額



屋根の銅板がまぶしく光っています
で間に合うはずでし
たが、建設委員会で間

完成には仏具

この間、坐禅堂の基本設計の検討と作成、建立資金勧募についての検討、会員はじめ一般の方へのご寄付のお願い、千葉・茨城県下の坐禅堂調査、建設工事に関して工匠堂との交渉と契約、地鎮式の準備と実施、上棟式の準備と実施、ご寄付をいただいた方への札状発送などを行つて来ました。現在は坐禅堂内部の備品の選定・購入、外部の外構工事等についての検討を行つています。

坐禅堂の屋根が銅板で葺かれ、夏の強烈な

関係の備品や、より節電効果の高い照明器具への変更、外構整備などで一九三万円の追加費用が必要となることが判明いたしました。

七月の参禪会で再度坐禅堂建立のご寄付をお願いしましたところ、皆様方からご快諾をいただき、続々と追加のご寄付申込みが寄せられております。

このような皆様方からの篤い志により、立派な坐禅堂が皆様の前にご披露される日が近づいてまいりました。坐禅堂を備えた寺院が極端に少ない千葉県で、開單式を催すことができるのは、大変意義深いことだと存じます。

坐禅堂建設委員会は平成二二二年二月から活動を開始し、今年の七月まで二五回にわたつて会合をかさねてきました。

この間、坐禅堂の基本設計の検討と作成、建立資金勧募についての検討、会員はじめ一般の方へのご寄付のお願い、千葉・茨城県下の坐禅堂調査、建設工事に関して工匠堂との交渉と契約、地鎮式の準備と実施、上棟式の準備と実施、ご寄付をいただいた方への札状発送などを行つて来ました。現在は坐禅堂内部の備品の選定・購入、外部の外構工事等についての検討を行つています。

このように多くの方々のご努力とご支援により、坐禅堂は今秋完工となる予定です。素晴らしい坐禅堂の前に上がり、只管打坐できる日はもう目前に来ているのです。感謝に堪えません。これからもしっかりと報恩の坐禅に徹したいと存じます。

(五十嵐 記)



毎回熱心に意見を交わす建設委員会の各位

本堂での最後の一夜接心

今年も六月九日（土）・一〇日（日）の二日間にわたって一夜接心が行われました。本堂で行われる一夜接心は今年が最後となります。来年の一夜接心は現在建設中の坐禅堂で行われる予定です。



初日の午後二時より上山受け付けが始まり、二時半に小畠代表幹事さんからのオリエンテーションを受け、三時より一炷目の坐禅が始まりました。一炷目の坐禅の口宣が終わり少し経ったとき、「眠らない！」と叱責の一喝があり、全員ハツとして思わず背筋をピンと伸ばしました。

一炷目の坐禅が終わり禅講に移りました。禅講は昨年に引き続き瑩山禅師の『坐禅用心記』を拝読しましたが、ほとんどの方は昨年の一夜接心で何の講義を受けたか憶えていないあります。ご老師もそのところを見通されて、「人間忘れるからよいのです。忘れるから勉強するのです。忘れなかつたら頭がパンクします」と、温かいお言葉をおかけくださいました。

今年ご提唱された『坐禅用心記』の箇所は、

坐禅にあたつて用心しなければならないことを、具体的に懇切丁寧にお示しなされているところです。最初に『宗鏡錄』百巻を撰せられた永明延寿智覺禪師の「妄息めは寂生じ、寂生ずれば、智現ず、智現すれば真見ると」を引かれて、まず妄心を滅することが第一の用心であり、そのためには、技芸術道や医方占相などから離れるべきであると述べられて

います。さらに歌舞伎樂、諺諍戯論、名相利養などに近づいてはならないと説かれていました。

道元禪師の『普勸坐禪儀』が、坐禅の威儀・作法や心構え、坐禅が仏法の真髓であることを簡潔に述べられているのとは対照的に、『坐禅用心記』は事細かに坐禅上で用心すべきことを、具体的に述べられています。親切心のかたまりのようなものです。

一時間半にわたる一日目の講義が終わり薬石になりました。薬石の後、今泉さんがお茶をたててくださり、甘みを抑えた和菓子と一緒に馥郁としたお茶を一服いただき、厳肅な修行の合間に優雅なひと時を過ごすことができました。その後坐禅を二炷行い、就寝につくまでの間、今秋完成予定の坐禅堂について色々と語り合いました。

初めての一夜接心を終えて

柏市 春日 仁美

六月九日、初めての一夜接心に参加すべく上山致しました。

関東に梅雨入り宣言が出された当日で、生憎の雨でしたが、たくさんの方が集まり、オリエンテーションの後すぐ一炷目。ご老師の

「眠らない！」との一喝にびっくりしたせいでもないのですが、途中坐布からすべり落ち、坐りなおそろかどうしようかとモゾモゾしているうちに終了。一炷目から先が思いやられます。

その後、最初の禪講です。テキストは坐禪初心者の私にはありがたい『坐禪用心記』です。ここで、しつかり坐禪の心得や作法を学ぼうと臨みましたが、『正法眼藏』に比べれば分かり易いものの、文章が難しく文字を追うのがやっとです。

禪講が終り、待ちに待った夕食です。(夕食を薬石という事を始めて知りました。)どちらも野菜の新鮮な味を生かした味付けが大変おいしく、品数もボリュームも豊富で肉食系女子の私も大満足でした。食後に今泉さんにお抹茶をたてて頂き、おいしいお菓子と一緒に頂きました。

食事の後片付けをしながら、女性の皆さんはお帰りになる為、私一人で庫裏に泊めて頂く事を知った皆さんから、励ましのお言葉を頂く。「帰つちやおうかな」と弱気になつていたところ、気を取り直し、泊りこみしつかり修行に励もうと腹を括つたところで二炷目。本堂の幽玄な雰囲気が新鮮です。

続いて三炷目。薄暗い本堂の雰囲気が映画館に似ているせいか、足が痛いせいか、岩場に腕が挟まり、自ら挟まつた腕を切断して生還したクライマーを描いた映画を思いだし、いくら足が痛くても切斷できないなあ、という雑念を追い払おうと葛藤しているうちに、鐘が鳴り初日の行持は全て終了です。

一人ではもつたいないほど広いお部屋に案内して頂き就寝。「疲れなかつたらどうしよう」という心配は全く杞憂に終わりました。

私にとって一夜接心の最大の難関の一つで

ある四時起床は、奇跡的に振鈴の音で眼が醒めました。しかし早朝の時間はぼんやりしたまま、なんとか行持をこなしているといったありさまでした。作務の時間を迎え、お手洗い掃除をしたせいか、やつと気分もすつきり、お粥を頂いて元気も出たところで六炷目を坐に頂きました。

茶話会では、皆さん口々に足が痛かったと仰つていらしたので、ホッといたしました。ただ最後にご老師が仰つた「怠け者の私がこうして坐禪が出来るのも、皆さんのお陰です。」との謙虚なお言葉に、今回の一夜接心で大変な修行をしたような気持ちになつて、私は深く恥じ入り、ますますご老師のもとで坐禪に励まなければ、という気持ちを新たに致しました。

改めて良き師、良き先輩に恵まれ、坐禪出来る環境を有り難く感じた二日間でした。皆様、本当にご指導ありがとうございました。

のだよ、と言われている様な気が致しました。お茶を頂いた後(この時頂いた和菓子がとてもおいしかつたです)、今回の一夜接心最後の坐禪に臨みます。『普勸坐禪儀』を諷誦する間は気が紛れるものの、足の痛みがピークに達し、時間が本当に長く感じました。

七炷終えてほつとしたところでお昼の時間

です。イタリアンの前菜の様なトマトの詰め物と、ゆかりとグリーンピースのおにぎり、といった色とりどりのお料理を前に、ワインが飲みたいなあ、と思いながら(すみません)

おいしく頂きました。

安本さんご逝去

教理として「成唯識論」を究め、修行として「坐禪」と「歩き遍路」を全うされた安本小太郎さんが六月三〇日に永眠されました。

生前、安本さんと親交のあつたお二人から追悼の文が寄せられましたので、ご味読ください。

師、安本小太郎様を追悼して

流山市 久光守之

そちらの風は何色ですか、長年菩薩行を実践躬行された貴方ですから、きっと青黄赤白黒に非ざる風の色を見て、楽しんでおられるのでしょうか。

貴方は朝夕各一時間三〇分の坐禪を正身端

坐され、この参禪会で二〇数年、それ以前に一〇余年通算四〇年以上坐禅されました。その貴方の追悼文を書きますのは、光榮ですが、悲しくてまた私の晚学が悔れます。

思い出せば一〇幾年か前、ある小さな文学の会でお会いしたのが初めてですね。その時貴方の発言の中に坐禪の語が出て、その会の後、当地に坐禪修行が出来る所がありますか、



道友と寛ぐありし日の安本さん

との私の質問に、即、この参禪会にご紹介してください。今考までした。今考えますとこれこそ仏縁だと痛感されます。ありがとうございます。

まだまだ貴方のすばらしい事を書けば限りがありませんので、貴方の奥様からお聞きいたお話をお届けします。

貴方は、四六年間奥様に苦情を云われたことがなく、病院でも、介護の人、医師、家族等、他の人に接する態度が変わらなかつたそうですね。奥様は今は感謝で一杯で、私には過ぎた夫でしたと、仰つておられました。

また貴方は、死後は家族葬にして、骨は家庭の隅にでも埋めてくれ（家族の方は反対しておられたそうだが）。そして椎名ご老師は忙しくて、また大変立派な方であり、おそれ多いでの葬儀にはお招きしないようになると言わされました。しかしお通夜の時にご老師が来られた事を、「主人は一番驚き、恐縮し、身に余る光榮と感謝していると思ひます。」と、奥様は仰つておられました。

私は今再び貴方に会えない事が残念です。まだまだ唯識学や種々の事をお聞きしたいと

その時、私は確か四国八十八ヶ所歩き遍路を三周した後だつたと思います。その話をした後、貴方は誰にも告げず、四国八十八ヶ所を歩き始め、そして坂東、秩父、西国と全てを歩き遍路をしました。大変な修行です。この話を聞いた時は、貴方への尊敬の念でいっぱいでした。

歩き遍路は私が先でしたが、貴方の方が立派でした。私はまた六巡目の四国遍路歩きを夢みて、今も一日二時間のウォーキングをしている事をご報告致します。

また私が『正法眼藏全講』（岸沢惟安老師提唱、大法輪閣）を読み、書写している事を貴方にお話した時、貴方は「岸沢惟安ご老師は正統派ですよ」と励ましてくれましたね。

思いますが、生老病死は四枚の般若と思い、悲しいですがお別れします。

最後に、貴方のおられる涅槃の雲の色は何色ですか。その慈雲の色を貴方は見、慈音を静かに聴いておられるのでしょうかね。

告別式の最後のお別れの時、貴方のお顔を拝見し、私は「諦観法王法、法王法如是」の言を秘かに思いました。今は貴方との巡り合いに感謝し、合掌します、本当にありがとうございました。そしてさよなら。

沢音と 共に雲に入る 遍路かな

持戒の人

柏市 武田 博志

安本さんは体調をくずされ、ここ数年参禅会を休まれていましたが、亡くなられたとの訃報が道友のメールから送られてきました。

安本さんは昭和五一年から坐禪を始め、五九年龍泉院に参禅。誰よりも早くお寺に来て、本堂の決まった場所（单）で坐っていました。姿勢が良く、びたりと根を下したように身じろぎもしない。『正法眼藏』の講義には前から二列目に正座し、まっすぐ老師の顔を見て聴いていました。そのお姿からは一言も聞き漏らすまいという必死さが伝わってきました。



在家得度を授けられた安本さん

安本さんは昭和五一年から坐禪を始め、五九年龍泉院に参禅。誰よりも早くお寺に来て、本堂の決まった場所（单）で坐っていました。姿勢が良く、びたりと根を下したように身じろぎもしない。『正法眼藏』の講義には前から二列目に正座し、まっすぐ老師の顔を見て聴いていました。そのお姿からは一言も聞き漏らすまいという必死さが伝わってきました。

の部分は場所と

ご冥福をお祈りいたします。

合掌

茶話会で自己紹介のあと、お話を披露してもらえるようになったのは、だいぶ後のことでした。菜食主義のこと、運動がてらよく歩いていること、季節の移り変わりの様子と、身近な内容がほとんどでした。

いつだつたか、すすめの話をされました。バスを降りお寺への裏道を歩いていくと、子すすめが羽をばたつかせていました。巣立つばかりなのかヨタヨタしていたが、しばらくして、ようやく飛んでいったが、心配でその様子を見ていたと仰っていました。私はその時の安本さんのホッとした気持ちや温かい眼差しが、懐かしく思い起こされます。

会報『明珠』の編集をしていた頃、安本さんに札所巡りと唯識のお話を記事にしたいと頼みました。同じ編集係の牧野さんににはインタビュアになつてもらひ、誰にも分かる平易な内容の記事を目指しました。

平成三年に在家得度され、二〇名の道友と共に受戒しました。厳格に戒を守るのは大変なことです。安本さんは宴会でも酒を飲まず菜食を徹底していました。私は安本さんから戒を保つことの重大さを教わり、持戒し日々精進し続けた安本さんの姿を忘れません。

きりつとした端坐、安本さんの文章や発言は実直なお人柄そのものでした。安本さんとの出会いを天に感謝します。

場面の展開で話が流れていくのに、それぞれの場面に応じて動く心を表現する所はとても難しいのです。何度も聞いても、意識の世界を自己分析して、独りよがりでない判断をどうしてできるのか疑問が生じる。しばらくして、自我をなくせば可能かもしれない、ならば坐禅そのものではないかと思い始めました。

安本さんはずいぶん前から唯識を勉強されてきました。分別をもたず自分自身にしつかり向かい、心静かに内省する。禅を行じる者の基本であり、必要な資質のように思いました。安本さんのまつさらな心は唯識によつて磨かれ、自らの心を容易に捉えられたのでしょう。

艱難と希望

我孫子市 清水秀男

今年の春、ある会合で青山学院を訪れたことがあった。青山学院はキリスト教（プロテスタン・メソジスト派）による人格教育を標榜する、一三〇年の歴史を有する学園である。当然、学内には礼拝堂もあり、入口に新約聖書の次のような言葉があつた。

「艱難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」（ローマ信徒への手紙、五章三、四節）

この言葉を読んでハッと気づき胸を打たれた。何故ならば、この言葉は私が病に臥していたここ四～五年の間、私の心の杖になつていた言葉の一つであつたからである。

私はキリスト教については全く無知であるが、病臥中にこのパウロの言葉を味読して、感激したことを思い出す。私なりに解釈し、感じたことを記してみたいと思う。

① 人生には思わぬ艱難辛苦が訪れる。病気であつたり、事故・災害であつたり、死の別であつたり、事業の失敗であつたり、家庭内不和であつたり様々である。人生は自分の

思いの通りにならない、まさに苦である。しかし、その現実はどうあがいても変わらない。あがけばあがく程、深い泥沼にはまり込み苦しみは増すばかりである。ならば、現実にどつかと腰を据え、その苦を受けとめてみよう。現実は変わらないが、変えられるのは自分の方考え方なり態度である。

苦難にも光と影がある。艱難辛苦を影とのみ捉えるのでなく、人生への贈り物と捉えられれば、私を成長させるための光になるかも知れない。影濃ければ、光強しである。

癌と死に向き合いながら濃密な人生を生きた浄土真宗の寺の坊守、鈴木章子さんの「光と影」と題する印象深い一文がある。

「ダリアを描いていたら 影があつて光があつた。何故ならば、この言葉は私が病に臥していたここ四～五年の間、私の心の杖になつていた言葉の一つであつたからである。

私はキリスト教については全く無知であるが、病臥中にこのパウロの言葉を味読して、感激したことを思い出す。私なりに解釈し、感じたことを記してみたいと思う。

② 「艱難が忍耐を生み出し」とある。この場合、忍耐とは単に我慢して耐え忍ぶという消極的意味だけではなく、「光に向つて、確固不動の信念を持ち、あきらめず辛抱強く立ち向かう積極的態度」ということではないだろ

うか。

③ 「忍耐が練られた品性を生み出し」とある。練られたとは、不純物の多い粗金から何度も何度も精錬され、純度をあげて純金にしていく事や、砂鉄から何度も何度も火を通し鍛錬して、名刀に作りあげる事をイメージして生み出された忍耐の不斷の継続によって、人格が陶冶され続け、純化され次第に円熟化され高められていく。これに関連して、道元禅師の言葉を二つあげてみたい。

一つは、「玉は琢磨によりて器となる。人は練磨によりて仁（ひと）となる。何（いざれ）の玉かはじめより光有る。誰人か初心より利なる。必ずみがくべし。すべからく練るべし。自ら卑下して、学道をゆるくする事なかれ。」（『正法眼藏隨聞記』卷五、第四節、長円寺本）

二つは、「いまの一当は、むかしの百不当の力なり、百不当の一老なり」（『正法眼藏』「説心説性」）。

私なりに解釈すると、菩提心を起し、修行に取り組んでも、なかなか眞実の道を得られない。しかし、それにめげることなく何度も何度も、正師や經典の教えに従つて行じてい

くうちに、円熟した真理の道に到達することが出来る。それは今まで、百回も千回も失敗を重ねながらもあきらめず行じ、熟成してきたからこそ至り得た道である。「忍耐が練られた品性を生み出し」とは、まさに二つの道元の言葉と、相通するものがあるのではないだろうか。

④「練られた品性が希望を生み出す」とある。多くの難難を通して、陶冶され、純化され、円熟化した品性を持つた人は、如何なる耐え難い苦難の状況に遭遇しようが、希望を見い出して力強く生きていく。そして、その生き様は、周りの多くの人々の心にも希望の光を与え続け、希望の火をともし続けていく大きな力となる。

未熟ながら、この聖書の言葉を以上の様に味わった次第である。そして、自分自身は「練られた品性」とは程遠い状況だが、この言葉によつて、病を超克していく上で勇気と希望のパワーを頂いた。これは何事にも変えがたい誠に有難い事であった。

三浦綾子の小説『生きること 思うこと』の中に、「今までをふり返つてみて大きな不幸と思われることが、実は大切な人生の曲がり角と思えてならない」という一節がある。

本当にその通りだと思う。発病した時は六三歳、それまで周りの景色も見ないで闇雲に突っ走ってきた人生だった。病は、立ち止まり谦虚になつて、病が語りかけるものに耳を傾け、自分の心を澄ませ見つめる様にとのメッセージではなかつたかと思う。大病は私にとって大切な人生の曲がり角であり、贈り物であつたと思う。そして、私が敬愛してやまない禅僧、青山俊董老尼の次の言葉が吸い込まれる様に私の中に入つていつた。

「苦に導かれて、アンテナが立ち、聞く耳が開け、真実の教えや、人に出会うことができ、それによって命の尊さや、ほんとうの生きざまにめざめることができたら、健康なばかりにアンテナが立たず、聞こえず、見えず、気づかずに終える人生より、どれほどずばらしいかわかりません。苦は気づけよという仏さまよりの慈悲の贈り物です。南無病氣大菩薩です」

しかし、折角立つたアンテナも、煩惱深き私にはいつの間にか錆びがちである。仏教詩人の榎本栄一師の次の言葉は、私の肺腑を衝く。

「うぬぼれは 木の上からボタンと落ちた落ちたうぬぼれは いつのまにか また木の

上に登つている」

正しく間違いなく受信出来る様に、アンテナを常に磨き整備して置かねばならないと自己戒している日々である。以上

写真とこころ（五）

■ 取手市 三町 勲

つたない「写真とこころ」の連載もそろそろ筆をおさめさせて戴く時期がまいりました。そこで、写真の真実・真理というものを振り返つてみたいと思います。

『正法眼蔵』「道心」の巻に「坐禪は三界の法にあらず、仏祖の法なり」とあります。この「仏祖の法」とは天地宇宙の真実・真理であります。つまり、真実の有り様、有り方、そのものであります。その真実の世界を掬い取るのが「写真とこころ」です。

但し、その真実の中に撮影者自身の課題なり目標が溶け込んでいなければ、ただの写真です。その狙いは、撮る人の脳の中の全人生・全思想の宿坊で精査し、イメージとして加工され、撮る瞬間の時間と空間の中に還されたものの映像化です。これが写真の真実です。

■ 「一顆明珠」の中に世界を創造する

左記の写真はシクラメンの蕾の先端に水滴が付いている。その水滴が首題であり、真実です。水滴の中に大きな世界がある。そこには別なシクラメンが咲き誇った世界が創造されている。



しかし、写真というものはそれだけでは、芸術的な価値は生まれない。狙いの上に更に必要なのは、構図とか構成の妙であります。これは古来より色々な芸術家が追及してきた遺産です。「温故知新」という言葉で、我々にそれを教えてくれています。

■画面の中を四つの世界に分けてみる

撮りたい写真の画面を画面の中心から縦横に線引きして、四つに分割します。その四つの画面が充実していなければならぬ。例え



右の写真は「高崎白衣大観音」を主題とするする映像です。右下の画面が観音像、左下が満開を過ぎた梅の老木、上の左右は満開の桜で、画面が充実した構成になつていて。そこの自然の眞実の中に観音さんの静かな容姿が、自然・宇宙に溶け込んで一体である。素朴な法則であるが、これが全体の画面を引き締めてくれています。

狙いにあつたものを脳の中の宿坊で精査し、イメージとして加工され、撮る瞬間の時

間と空間の中に還されたものの映像化です。

■「道を行することは衆力を以てす」

趣味でも、修行でも物事を行うには、一人

ば、その分割した画面の一つが空白に近い画面だとすれば、写真全体が空虚なものになってしまいます。

『教育を問い合わせる九四歳の日々』の中で教育研究者・大田堯氏は次のように言っています。

「教育は教えるということが中心ではなく一学習を通して行うものーである。人と人の接觸によって行われるものである。

人間一人一人がそれぞれの特性・個性を持つて生まれてきた生命体であるから、それをお互いが磨き合うことによって進歩があり、前進するのである。そこでは、他人は情報の発信体であり、個人はその情報を吸収する受信体として情報を吸収して、進歩して智慧を得る。つまり学習をする」と、まさしく道元の言葉に通じるものがあります。

写真の修業にしても、心の問題として自分自身の中に整理しておかなければなりません。これは大切なことです。

■二一世紀は「心の時代」

二〇世紀はカネとモノの時代であつた。それをお々は引きずつていてのが現状です。し

では長続きしない。それには道友やグループが力になるものです。人間の一一番悪い自我を抑制させてくれる力もあります。へこたれたり、壁にぶち当たつたりした時の支援者になつてくれます。

かし、これを早急に脱却して、二一世紀の「心

の時代」を打ちたてなければならない。

それには、社会哲学者・鶴見和子氏の主張する「価値としての共生」の四つの層を想い出したい。

① 人間と人間以外のすべての自然のものとの共生

② 女と男の共生

③ 異文化を持つ人と人との間の国境ない及び国境を超えた共生

④ 異世代館（死者一生者—これから生まれてくる生命）の共生

人間には肉体を生かしている靈魂があり、同じく動物、植物、無生物にも、即ち、自然現象一般に靈魂や精靈が作用しているという宗教的思考により、人間の社会、経済、文化の価値觀を見直し、二〇世紀の病魔から脱皮することが最優先の課題であります。

「心の時代」の到来が、写真藝術もその未来に届く価値觀の変革の一転語になればと思ひます。

■ 自然を愛する心の大切さ

日本は東日本大震災による自然現象と原発により、人為的自然破壊が同時に起つた。特に、原発によるしかも人為的な自然破壊は絶

対にあつてはならない。

小出裕章氏は『騙されたあなたにも責任がある』の本の中で、「勿論、『原発は安全』とだました側の責任は大きい。騙されたあなたにも責任がある」と警告している。二一世紀には、国民一人ひとりが眞実の眼を持たなければならぬ。これも「衆力を以てす」に習いたいものです。

■「写真とこころ」を振り返って

この連載の動機は、禅友の添田昌弘氏の句集に刺激されての執筆であった。添田さんの『紙魚』の秀作

草の芽の小さき影や坐禪堂
の遠近感のある俳句との出会いであります。

この坐禪堂が参禅会の衆力によつて完成に向つて槌音が響いている。これらすべての流れ

は、椎名ご老師をはじめ、禅友の方々の衆縁のもたらすものであり、大変有難いことです。

これからも、生きている限り、皆さまに見ていただける写真を撮り続けていきたいし、「写真とこころ」を探求していきたいと思ひます。今回をもつて連載を完了させて戴きました。有難うございました。



漱石の禅と俳句

流山市 添田 昌弘

夏目漱石は鎌倉の円覚寺で明治二七年の歳暮から二八年の年頭にかけて約一〇日間の参禅をした。漱石は明治二六年に東京帝国大学英文科を卒業し、高等師範学校の英語教師になる。日本人が英文学を学ぶことに違和感を覚え、肺結核の初期と医師に診断され、療養に専心しつつも、迫りくる死への不安と極度の神經衰弱と脅迫觀念にかられるようになる。そして円覚寺に参禅するが効果は得られなかつた。

漱石の禅に関する俳句を代表するものとしてはつぎのようなものがある。

本来の面目如何雪達磨

漱石の大学時代の友人菅虎雄の紹介状を懷に、円覚寺の門を叩いた。円覚寺での参禅で漱石が釈宗演から与えられた公案が「父母未生以前、本来の面目」というものであつた。漱石はこの公案に答えることが出来なかつた。

このときのこととを小説『門』に次のように書いている。

「彼は悟という美名に欺かれて、彼の平生に似合わぬ冒險を試みようと企てたのである。

そうして此冒險に成功すれば、今の不安な弱々しい自分を救つ事が出来はしないかと、果敢なる望みを抱いたのである。」

「仏性は白き桔梗にこそあらめ

「帰源院即事」の前書がある。帰源院は円覚寺にある塔頭である。ここに漱石の参禪を記念してこの句碑が建てられている。江戸時代の俳人上島鬼貫が、「仏とは」と問われ、

「庭前に白く咲きたる椿かな」と句を作ったという逸話がある。漱石にこの句が念頭にあったのかかもしれない。参禪した寺域で、眼前にひつそりと咲いた白い桔梗を見て、そこに仮性ありと感じたのである。桔梗の清楚さ無垢なる美を讃えている。

葷酒山門に入るを許さず紅葉哉

この句は漱石の弟子寺田寅彦が漱石に送つた句である。葷はニラ、ニンニク、ネギなど臭いの強い野菜をいう。実質的には鶴肉、魚肉も入れるらしい。

漱石の『草枕』に次の文章がある。

「偶然と宿を出でて足の向く所に任せてぶらぶらするうち、つい此石燈の下に出た。しばらく不許葷酒入山門と云う石を撫でて立っていたが、急にうれしくなつて登り出したのである。」

漱石は甘党で殆ど酒は飲まなかつたらしい。以前、友人と木曽のお寺に行つたとき、山門脇にこの石柱があつた。前の晩、宿で少々飲んでいたので、それを見て友人は我々のことだろう。「許さざる葷酒山門に入る」と書いてあると言つた。

私は「菊日和葷酒山門より出でり」の句がある。

宗演は大正五年一二月一二日の漱石の葬儀の際に導師を務め引導を渡した。夏目家の宗旨が浄土真宗であるにもかかわらず、漱石の友人中村是公への遺言に従つた。宗演の引導の一喝は、会葬者たちの胸に沁みる見事なものであつたという。

漱石の死後、宗演は漱石と初めて相見した時の印象を『漱石全集』の月報「禪の境地」のなかで次のように語つてゐる。

「氏の小説『門』というのを、ある人が持つてきて、漱石氏が初めて私のところへ來た折の事が描いてあるから読んでみよ」というので、初めてこの小説を手にしたわけだが、あの中には宗助という男が鎌倉の禪堂へ来て老師、老師と皆の言うその老師に逢つてみると、心の内でどんな老人かと思つたら、まだほんの若い坊主だと驚く件、あれがおかしか

つたので今でも覚えている。氏の参禪生活はあんな風な気持ちであんな風にして始まつたのである。まあ一口で言えば氏の参禪生活は極めて平凡な普通なもので、とりあげて異彩のことだらう。「許さざる葷酒山門に入る」と認められるようなことはなかつた。」

以上の他に、漱石には禪に関する俳句は次のようなものがある。

廓然無聖達磨の像や水仙花

達磨忌や達磨に似たる顔は誰

玉か石か瓦はあるは秋風か

春風に祖師西来の意あるべし
禪僧に旗動きけり春の風

上棟式

快晴に恵まれた大安吉日の四月二九日（日、祝）午前一〇時から坐禅堂の上棟式が執り行われました。八時半には建設委員の方々が集合し、祭壇の飾り付けや会場のセッティングに取り掛かりました。会場には既に工匠堂さんにより紅白の幕が張られており、屋根の上には五色の幟が三本と、破魔矢が一本、青空のもとタツキリと立てられていました。

一〇時、カセットテープから雅楽が流れると、ご老師を導師とした一行が入場されました。一同起立してご老師一行を迎え、普同二



ご老師、工匠堂さん、総代さん、参禪会員揃って記念写真

拝、坐禪堂上棟を讀える拈香法語がご老師により読み上げられ、全員で般若心經一巻を諷誦し、消災咒が唱えられる中を全員でお焼香を行いました。その後、小畠代表幹事が上棟式回向文を唱えられ、最後にもう一度普同三拝を行い、仏式による上棟式は円成しました。

続いて工匠堂さんの職方さんによる儀式が行われました。まず検地の儀（杭打ちの儀）が

行われ、「エイ エイ エイ」の掛け声と共に、三回博士杭を打ちます。さらに棟上げの儀（引き綱の儀）が行われ、参列者全員が二本の綱のところに行き、棟梁である渡辺社長の合図で、全員「エイ エイ エイ」と掛け声を合わせて綱を引きました。

次は木槌の儀ですが、すでに屋根の上には若い職方さん三人が登つており、「エイ エイ エイ」と掛け声をかけながら、三回槌を討ちました。

最後に四方拝が行われました。屋根の四方に鏡餅が安置されており、その前に小畠建設委員長、杉浦書記、刑部会計担当、五十嵐が立ち、屋根の正面にはご老師が立たれ、小畠委員長の合図のもと、工事の無事を祈つて三回お拜をしました。

これで工匠堂さんによる上棟式は無事円成し、全員で会場の後片付けに取り掛かり、上棟式の会場の片づけが終わつた後、祝宴会場のある大悲殿に移動しました。祝宴では小畠さんが創作された上棟を祝う漢詩を、小山さんが吟じられ、さらに工匠堂の若い職人さんが木遣りをご披露され、祝宴は最高潮に達しました。

施食会

八月一六日、毎年恒例の龍泉院施食会のお手伝いを行いました。今回は一〇数名と例年になく多くの方が参加されました。

午前八時半から本堂の飾り付けが始まりました。今年から田上さんが杉浦さんの弟子となり、天幕の張り方を教わっていました。来年は田上さんが杉浦さんにかわって、幕張に挑戦されるものと思います。

本堂の飾り付けは一〇時半過ぎには終わり、大悲殿の台所で一休みした後、早めの昼食をいただき、その後、本堂の来場者対応と駐車場の整備の二班に分かれ、それぞれの係につきました。

午後一時から滋賀県祇樹院住職栗谷良道老師による「魂のゆくえ」と題する法話がありました。栗谷老師は一昨年の施食会でも「三界萬靈」と題してのご法話をいただきました。

三時半に施食会が無事円成し、後片付けをした後、大悲殿でご老師よりお礼のお言葉をいただきました。ウーロン茶で乾杯した後しばし歓談し、帰宅いたしました。今年の夏の一大イベントも終わりましたが、猛暑の方は一向に衰える気配が見えません。

◇◇会員便り◇◇

●今年三月に『大法輪』から龍泉院参禅会の活動について取材を受けましたが、『大法輪』九月号に龍泉院参禅会の記事が七ページにて掲載されています。

記事内容は、三月の月例参禅会を取材された記者の方の参禅の感

想と、ご老師の『正法眼藏』「大修行」の巻のご提唱を聽講された報告です。この他、会員へのインタビュー記事も掲載されています。タイトルは「心と身体に効く寺社龍泉院（千葉県柏市）の参禅会」となっています。関心ある方は書店でお求め下さい。大悲殿の玄関にも一冊備えられています。

龍泉院参禅会簡介

（定例参禅会）

- ・日 時 每月第四日曜九時（初参加の方は八時半）
- ・坐 禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順
（坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分）
- ・講 義 木版三通、開経偈、『正法眼藏』提唱
- ・座 談 自己紹介・喫茶・座談、正午解散
- ・参 加 資 格 年齢、性別など一切不問、初心者には懇切に指導
- ・会 費 無料

（年間行事）

- ・一夜接心 本年は六月九・一〇日、七炷の坐禅と提唱等
- ・成道会 本年は二二月二日、坐禅・法要・問答・法話・点心等
- ・他の行事 混槃会（二月十五日）、花祭り（四月八日）、施食会（八月一六日）手伝い、歳末煤払い（二二月例会後）
- ・作 務 每月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等
- ・刊 行 物 『明珠』（四月八日と一〇月五日発行）、「口宣」（年一回）
- ・[ウェブサイト <http://www.russeen.org/>] 「明珠」「口宣」のバックナンバーがご覧になります。

沼南雑記

【定例参禅会・年間行事】

平成二四年	（）内は座談の司会者	三月二十五日	（徳山 浩氏）	三〇名	二二日（二名）	一四日（二名）	二〇日（二名）	二二日（二名）	八月一日（九名）、	八日（二名）	一一日（七名）、	一七日（四名）
平成二五年	（）内は座談の司会者	四月八日	（徳山 浩氏）	二二名	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	八月三日（九名）、	八日（二名）	一日（七名）、	一七日（四名）
平成二六年	（）内は座談の司会者	四月二二日	（小山 齋氏）	三六名	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	八月二二日（九名）、	八日（二名）	二二日（七名）、	一七日（四名）
平成二七年	（）内は座談の司会者	五月二七日	（鈴木 節朗氏）	三一名	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	八月二二日（九名）、	八日（二名）	二二日（七名）、	一七日（四名）
平成二八年	（）内は座談の司会者	六月九・一〇日	（小畠 二郎氏）	二四名	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	八月二二日（九名）、	八日（二名）	二二日（七名）、	一七日（四名）
平成二九年	（）内は座談の司会者	六月二十四日	（小畠 二郎氏）	二四名	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	八月二二日（九名）、	八日（二名）	二二日（七名）、	一七日（四名）
平成三十年	（）内は座談の司会者	七月二三日	（添田 昭治氏）	三三名	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	八月二二日（九名）、	八日（二名）	二二日（七名）、	一七日（四名）
平成三十一年	（）内は座談の司会者	八月二六日	（美川 聰氏）	三三名	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	八月二二日（九名）、	八日（二名）	二二日（七名）、	一七日（四名）
平成三十二年	（）内は座談の司会者	八月一六日	（永野 昌弘氏）	一七名	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	八月二二日（九名）、	八日（二名）	二二日（七名）、	一七日（四名）
平成三十三年	（）内は座談の司会者	八月一六日	（武弘氏）	一七名	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	二四日（二名）	八月二二日（九名）、	八日（二名）	二二日（七名）、	一七日（四名）

▼八月下旬、五山巡りや五台山、雲岡石窟など中国の仏教史蹟を參観してきました。中国経済の発展に伴い、中国各地の寺院は立派に建て直されました。龍泉院参禅会が平成二六年に訪れた曹山は、復興途中でしたが、今では立派な伽藍が立ち並んでいます。（秀嗣）